

徳川政権の成立と金銀山

― 鉾山間における移動と交流から ―

土 谷 紘 子

はじめに

本稿では慶長期の徳川氏直轄領の鉾山における、鉾山技術者や役人の移動について考察する。近世鉾山史の研究には小葉田淳氏の『日本鉾山史の研究』をはじめ、田中圭一氏や村上直氏らの業績があつて、特に鉾山をめぐる交流に関しては、鉾山への物資供給に関する研究や、鉾山町を中心にした商人や労働者の動きについて見たものがある。しかし鉾山技術者の移動を取り上げた研究は、技術交流や鉾山開発のために不可欠であるにも関わらず少ないと言えよう。

そこで本稿では、特に石見、佐渡、伊豆、生野銀山を取り上げ、鉾山に関わる人々の移動の様子を検討してその特質を明らかにし、その上で徳川氏直轄領鉾山の実態として、技術伝播と鉾山内の様子と移動に着目して考察していく。

一 慶長五―十九年における鉾山支配と移動

慶長五（一六〇〇）年九月の関ヶ原合戦後、家康は石見、佐渡、生野

銀山を接収して直轄領とした（地図①参照）。これらは十六世紀から開発が始まり、莫大な銀産出量を有していた重要な鉾山であつた。本項では徳川氏による鉾山支配が始まつた慶長五年から九年までの、徳川氏の直轄領鉾山支配とそこで生じた移動について検討し、はじめに直轄領鉾山の支配について見る。まず石見銀山の支配については、

一、銀山支配之儀、慶長五子年以前は碓と相知れ不申候得共、慶長六丑年より大久保石見守銀山奉行被仰付、延宝三卯年永田作太夫迄七十五ヶ年の間奉行所にて、同年柘植伝兵衛より御代官に相成、當時迄御代官所に御座候、（傍線筆者、以下同）

とある。傍線部のように家康は慶長六年、大久保長安を銀山奉行として石見銀山の支配に当らせた。長安は甲州出身で武田藏前衆の一員であつた。藏前衆とは甲州の代官で、領内蔵入地の年貢諸役の収納、土木治水、鉾山開発などを行い、蔵入地全般の支配に當つた。特に鉾山開発においては、黒川、保など各金山の金山衆とともに鉾山開発と管理を行つた。金山衆が金山を直接稼行、開発したのに対し、藏前衆は金山管理の統括的な掌握を担当した。長安は後に佐渡銀山、伊豆金山も直接支配することになり、徳川氏の鉾山政策の中心となる。また生野銀山の支配に

ついで、『生野銀山旧記』には次のようにある。

(前略) 天正十一戊戌年まで十七年、伊藤石見守殿御支配、此年羽柴秀吉公、伏見の城にて薨去、東照神君の御奉行として服部権太夫来り給ふ、二年御支配、慶長五年庚子、間宮彦次郎殿来り給ひて、同十九年甲寅まで十五年御支配、(後略)⁵⁾

生野銀山奉行には大久保長安ではなく間宮彦次郎、つまり新左衛門直元が任命された。間宮は北条氏の旧臣である。『寛政重修諸家譜』には、間宮が慶長三年に但馬の代官となったとあるが、生野銀山奉行就任は『生野銀山旧記』にある通り慶長五年である。⁶⁾ 家康は慶長三年に秀吉が死ぬと、服部権太夫を生野銀山の奉行とした。こうすることで家康は秀吉の直轄領であつた生野銀山を秀吉から引き継ぐ形で支配したのである。服部権太夫は政光を指すと考えられ、彼の父は永禄三(一五六〇)年に岡崎で家康に召抱えられた。⁷⁾ そして同五年、家康が生野銀山を領有してから間宮新左衛門を生野銀山奉行として銀山支配、経営を行わせた。以上のように、徳川氏直轄領銀山の支配は石見、佐渡、伊豆の銀山は大久保長安、生野銀山は間宮新左衛門がそれぞれ行うことになった。

直轄領銀山の支配体制を踏まえて、次に銀山をめぐる人間の移動の実態を見る。慶長五年から六年にかけて、大久保長安は石見銀山で地役人を召抱えた。地役人とは毛利時代から石見銀山の支配、経営に当たっていた者を言う。毛利時代の書状には、地役人として今井越中守、吉岡隼人、宗岡弥右衛門、熱田平右衛門、惣内吉兵衛、石田喜右衛門の名が見え、⁸⁾ このうち長安の銀山奉行就任後も長安に仕えたのは、今井、吉岡、宗岡であつた。特に吉岡隼人(出雲)、宗岡弥右衛門(佐渡)は長安の手代

となり、銀山支配において重要な役割を果たした。彼らの役割には銀山の支配や経営の他、次のような役目もあつた。

(前略) 此石見守と申は東照神君より六十餘州金銀山の奉行たるべき旨仰を蒙り居給ひ、諸国金銀山興衰の訴有る時は、公方より當国に扶持し置給ふ諸士の内銀山の事に預るものを以諸国に馳行しめ給ふ。其行時は必御朱印を頂戴す。(後略)⁹⁾

このように吉岡ら長安手代は、金銀山興衰の情報に基づいて、各地へ赴き銀山の調査を行った。そしてその際には、次のような伝馬朱印状を家康から下賜された。

伝馬二疋、自江戸伊豆ゆか嶋まで上下可出者也、慶長六年十二月三日、右宿中¹⁰⁾

この伝馬朱印状は吉岡隼人にあてたもので、江戸から伊豆の湯ヶ嶋まで伝馬を出し、家康は彼に伊豆金山の調査を行わせたと見られる。徳川氏の銀山政策のもとでは、長安の手代による銀山調査も行われるようになったのである。そして慶長八年からは徳川氏直轄領銀山の間で、技術者や役人を相互に往来させるようになる。それは同年に大久保長安が佐渡奉行に任命され、彼が石見、佐渡銀山の支配をはじめたことによる。

この時長安はまず、宗岡佐渡、大久保山城、小宮山民部らを目代として佐渡銀山へ派遣した。¹¹⁾ この後も佐渡、石見銀山間では様々な交流が生じた。続いてこの両銀山間における人間の移動について具体的に検討する。まず、年未詳(慶長八年か)十一月十五日付の大久保長安書状を次に引用しよう。

覚

一、其元諸山不相替鍵出候由、尤二候、弥入精可被申候事、

一、九月分諸役一紙披見候、今度何も方々へ指遣候間、定而其元万事可為由断候条、口屋、汲銀、諸役等入念可被申候、

一、銀吹ミ之やうす可申越候、満足申候様無由断吹可被申候事、

一、増外記同道候て波根筋へ被参候由、尤二候事、

一、佐州銀、日を追而盛候由大慶二候、定而其元ニても可為祝着候、

来春二舟も越候間、其元も一かと入精候舟之支度可被申付候事、

一、此中も佐州より出雲用所候て、今井金右衛門指越候、何も何事

無之由申候、心安可被存候事、

以上、霜月十五日、大石見(花押)、吉岡右近殿、参、

これは大久保長安が石見銀山陣屋にいる吉岡右近にあてた書状である。

長安支配下の銀山を各陣屋で直接支配、経営していたのは長安自身ではなく、吉岡右近のような手代であった。長安は陣屋から銀山の状況に関する報告を受けていた。それは史料中の「九月分諸役一紙披見候」、「銀吹ミ之やうす可申越候」などの文言からもわかるように、このような報告をうけて、長安は銀山経営に関する指示を陣屋へ出した。それが右のような書状である。このうち、傍線①から佐渡銀山の産銀が好調であることが窺われる。そして傍線②では、佐渡銀山から吉岡出雲が、用事のために今井金右衛門を石見へ向わせることを伝えている。石見銀山の地役人出身の吉岡出雲は、慶長八年十一月の時点で佐渡銀山に渡っていた。そして用事のために今井金右衛門を佐渡銀山から石見銀山に送った。これは銀山支配に関わる用事と考えられ、長安の佐渡銀山直接支配により、

石見、佐渡銀山間において長安手代の派遣や連絡の往来が生じたのである。

慶長九年四月には長安自身が佐渡銀山へ渡海し、銀山を見分した。この時、佐渡銀山支配の仕法が以前と比べて大きく変わった。中でも特徴的な変化としては支配機構の整備、銀山経営法の革新があげられる。まず、大久保長安は陣屋を鶴子から相川へ移し、はじめて町割を行った(地図②参照)。それまでの相川の様子については『佐渡風土記』に、

相川府中と成、府中開発之事、銀山次第に盛出るより、間歩口数拾個所に及へり、依之他国より大勢来り、所縁を求て爰に住ん事を願ふ、夫迄もしかゝ家居も不定、銀山をかせく者は、其所に於ては

〔木を伐、其を以て堀立に住居を拵、稼所変あれは崩し、又稼所に立て住居せり、則是を山小屋と云、其後人家定り家居と成事は、去年依天命、大久保石見守當国奉行職を蒙れり、夫迄は陣屋鶴子に有つる所、同年、先達而宗岡弥右衛門を渡し、陣屋を相川江移す事になれり、(後略)〕

とある。相川銀山は慶長六年に鶴子銀山の山師によつて発見された。

それ以後、銀山開発が進み、各地から人が大勢集まった。他国から来て銀山を稼ぐ者は、傍線部のように簡単な住居を建てて住み、稼行場所が変わると他へ移っていった。鉱山労働者は常に移動する存在であったことがここでも確かめられよう。このように長安が支配する前は短期間の銀山請負が主流であったが、銀山発見から三年がたち、銀山の規模も大きくなったことで、稼行もある程度計画的に行う必要が生じた。そこで長安はまず、銀山支配の拠点である陣屋を、当時の稼行の中心であった

相川に移して町割を行ったのである。さらに『佐渡年代記』には次のような記事がある。

一、石見守言上して、浪人の筋目を糺し、佐州へ遣し、夫々の役に當つ、今年具し来りし者の内、保科喜右衛門は鶴子銀山を預り、堀口弥右衛門は河原田城付地方を預り、鳥井嘉左衛門は夷組大野組代官となり、何れも俸米百俵以上三百俵迄を給ると云、又野田監物、川村寛助と云ものを、相川の町奉行とすといふ（後略）⁽¹⁵⁾

長安は浪人を佐渡銀山役人として登用し、銀山奉行、地方支配、代官など様々な役目を与えたのである。当時は統一政権確立の過程の戦乱で主を失った浪人が多くいて、その中には銀山の支配、経営に有用な者も含まれていた。延享三（一七四六）年、佐渡銀山の役人が自らの出自を記して奉行に提出した「諸役人先祖書」を見ると、「慶長九辰年大久保石見守殿御支配之節被召出」と、慶長九年に召抱えられて奉公をはじめたという者が目立つ⁽¹⁶⁾。また佐渡銀山の役人には石見や甲斐出身の者が多い。「先祖書」にも記事があり、引用した『佐渡年代記』にも見える鶴子銀山代官となった保科喜右衛門は長安と同様、武田藏前衆の出身である⁽¹⁷⁾。このように長安は佐渡銀山の支配機構を新たに形成した。この時、各地の由緒ある浪人を役人として佐渡銀山に集めた。

次に、銀山経営に関して『佐渡年代記』慶長九年条を見る。

一、金銀山の内、山師共を雇ひ、御入用を以穿出す所を御直山と云、山仕の入用を以稼間歩を自分山と云、此時御直山三十六ヶ所有て、右の山仕三拾六人へ俸米百俵迄を與へ、炭、留木、鉄、松

蠟燭等十分に渡せしと也、此山仕共多くは伊豆石見より来りしと云、割間歩を始め數十ヶ所の間歩々々弥繁昌せしにより、石見守言上せしにや味方但馬、原淡路、西山丹波など云山仕共御目見をも被仰付しといふ、（後略）⁽¹⁸⁾

これは陣屋が山師を雇って直接経営を行う御直山を制定した記事であるが、これに対して山師が自分の費用で稼ぐ山を自分山と言う。御直山を稼ぐ山師には、採鉱に必要な道具や俸米は陣屋から支給された。御直山を請負ったのは、石見や伊豆など各地の鉱山から集められた優れた山師達であった。後に割間歩の稼行に成功する味方但馬もこの時佐渡へ来た⁽¹⁹⁾。長安が支配する以前の佐渡銀山では、前に引用した『佐渡風土記』の記述からもわかるように、短期間の稼行が主流であった。それは短期間の内にできるだけ多くの運上をあげることを条件に稼行場所を請負う形態である⁽²⁰⁾。ここでは山師たちが競争して採鉱に当たるため、効率よく産銀量を増加できた。その反面、水抜普請など坑道の手入れができず、また乱掘により坑道が荒廃した。そのため湧水により稼行できない坑道も出てきた。そこで長安は水抜普請を行いながら採鉱を行うために御直山を定め、他の鉱山から招いた有能な山師に請負わせたのである。また石見銀山からは鉱山労働者も招いた。それに関して慶長九年四月十三日付の長安書状を掲げよう。

覚

一、二月廿八日、三月八日之書、何連も披見、本望之事、
一、其元五吹屋并諸間歩、諸口屋被入精由まんそく申候事、
一、銀子無由断御吹候由尤候事、

一、爰元金銀多わき候間、心安可被存候事、

一、此地様子もくわしく可申越候へ共、てこノ儀ニ付而、早飛脚越候間、早申候事、

以上、卯月十三日、大石見（花押）、吉岡右近殿へ、

追而我等爰元ニ、い申候内くつろけとして出雲近日其元へ可指越候間、其元くわしく可申越候、勘左衛門談入候ハハよきてこがしらまわしおろしてさしこし可被申候、由断あるましく候、是計ニ熊飛脚をこし申候、以上、

ここに見える「てこ」は手子を指し、「掘子」つまり掘大工の補助として坑内の雑用を行う子供である。⁽²⁾手子は成長すると掘大工となり、本格的に採鉱を行うのである。書状の中で長安は、佐渡の様子を詳しく報告すべきではあるが、手子の件について石見銀山へ早飛脚を送ったので急いで連絡が欲しいと書いている。長安による銀山経営法の革新、及びそれと並行して銀山の稼行が盛んになったため、佐渡銀山では採鉱労働者が不足した。そこで長安は石見銀山から労働者を調達しようとしたのである。このように、慶長八、九年の佐渡銀山では、石見銀山をはじめ各地から銀山巧者や労働者を派遣し、その技術によって採鉱を行おうとしていた。これは長安の支配計画に基づく人材派遣であるが、これとは別に鉱山労働者の自主的な移動も存在した。次にその様子と意義について「草見立史料」から考えてみたい。

つるしの内遊白ふる間歩者、遊白五貫目山ふるまぶ二口おさらへ可申候、くさりハ少成共あい申候ハハ、可申上候、我等しんろう分之儀ハ石州銀山かなこなみニ可被下候、若油断仕候ハハ、御山めしは

なさるへく候、以上、

たつ卯月八日　しやうないぬいのしやう印⁽³⁾

「草見立」とは、鉱石のありそうな場所を見立て、希望の稼行場所を申請することをいう。引用した史料には「我等しんろう分之儀ハ石州銀山かなこなみニ可被下候」とある。「しんろう」とは石見銀山において鉱石発見までに要した費用に応じた鏈を運上なしで掘り取る制度である。ここから彼はかつて石見銀山にいたとも考えられる。そして傍線部より、この者は「つるしの内遊白ふる間歩」を見立て、稼行場所として申請した。遊白とは山師の備前遊白をさすと思われる。彼は慶長九年の時点で相川にいることは、『佐渡年代記』慶長九年条の記述からわかる。

一、相川銀山初りてより、他国もの夥敷来り住居す、町々の名多くは住居の者の名を取て唱ふ、庄右衛門町は山仕大坂庄右衛門住し、宗徳町は田中宗徳か家あり、諏訪町は信州諏訪の者来りて住し、大工町四十物町は鶴子銀山に在し大工町四十物町の者来りて住し（中略）夕白町ハ、備前遊白住居、（後略）⁽⁴⁾

ここでは相川町の町名の由来を記している。その中に備前遊白が住んだという夕白町の名があつて、ここで慶長九年までに、遊白は鶴子から相川に移住したと考えられる。そこで「しやうないぬいのしやう」は、遊白がかつて稼いでいた鶴子銀山の坑道を再び稼行しようとしている。つまりここでは山師達に自由に山を見立てさせ、短期間の請負をさせることで、新しい坑道の発見、また古い坑道の再開発を試みたのである。慶長五年の銀山接收以後、徳川氏は直轄領鉱山の支配を始めた。このとき鉱山労働者の自由な移動に加え、長安や家康ら鉱山支配者の意図に基

づく、技術者や役人の派遣が起った。この点はそれまでの移動と比べて特徴的である。特に佐渡銀山では、長安の意図に基づく銀山巧者の派遣と、山師達の自主的な移動に基づく山見立の持つ利点を活用して銀山開発を試みていたと言えよう。

二 慶長十年代における鉱山支配と移動

慶長十年代に入ると、鉱山間での移動がより活発になった。それは長安の伊豆代官就任、佐渡銀山の不調、各地の金銀山発見による。本項では慶長十年代の直轄領鉱山支配と移動について検討する。まず慶長十一年、大久保長安は伊豆金山代官に就任した。『慶長見聞録案紙』には、

此月（割註○正月）、伊豆国金山銀子多可出といふ、佐渡国より出る程も可有之か、土百目にて銀百目積に成、金銀雜出によつて右之積り也、大久保石見守、豆州之御代官被仰付、自是以前は、彦坂小刑部勤之、此月（割註○十月）伊豆金山可鑿之由、京中江被立札、諸国より下る者不知其数、（後略）⁽²⁵⁾

とある。伊豆には土肥、縄地、湯ヶ島等の金山があり、慶長五年頃から徳川氏の支配下にあった。伊豆国代官は彦坂元成が勤めていたが、慶長十一年に百姓に非分をかけたことで失脚した。長安はその後任となったのである。同年四月に長安は、慶長五年に伊豆国銀山惣支配役となり、同九年頃に佐渡銀山へ渡っていた三嶋惣左衛門を見分のため伊豆金山へ派遣した。⁽²⁶⁾この時、三嶋に佐渡から伊豆まで伝馬三疋を出す伝馬朱印状が発給された。⁽²⁷⁾同十一年六月には川井政忠が伊豆銀山奉行となり、同心

五十名が預けられた。彼は甲斐の武田勝頼に仕えており、天正十一年十一月から家康に仕えた。⁽²⁸⁾

このように彦坂失脚後の伊豆金山の支配機構は、長安が伊豆金山の代官、そして銀山奉行は川井政忠となった。続いて、伊豆金山をめぐる人間の移動を見ていこう。まず『慶長見聞録案紙』の傍線部のように、慶長十一年十一月、長安は伊豆金山の採鉱を行う人材を集めるため、京都にその旨を記した高札を立てた。この結果、多くの人間が金山へ来た。続いて慶長十二年三月二日、大久保長安書状を次に引用する。

覚

一、二月廿四、同廿六日之一書披見候事、

① 一、其元山不相替盛候由満足申候、殊ニ不右衛門間歩鏈多上り吹ミ

の様子則 御前へ申上候処ニ、一段御機嫌能御座候間、心安可

被存事、

② 一、後藤下代之儀、則庄三へ申遣候間、さためて可参事、

（中略）

③ 一、万事河作兵、竹九郎右衛門相談候て可被申越候、由断有ましく

候事、

一、先段如申候、其元万事目付をまわし無由断やうニ可被申付事、

以上、三月二日、石見守判、戸田藤左衛門殿、

追而人足を以あらくちを何程もひかせ可被申候、所之儀者三島彦大夫など、可致談合候、あらくち計候てくさりつら見へ候へハ諸人取懸物ニて候間、可被致其分別候事、

（中略）

一、其元の儀、万事駿府ちかく候間、仕置かんよう候、佐州、石州
なと之相替候間、可致其心得候事、

④ 一、今度佐州より参候者共二もよき所見計、山渡可被申事、

一、三島惣左衛門切候大横相、弥念入きらせ可被申事、

一、りんさへ見出し近辺も無由断あらくちを引見可被申事、

以上、

これは大久保長安が伊豆金山にいる家老の戸田藤左衛門に宛てた書状であり、慶長十二、三年には長安手代として戸田藤左衛門が伊豆金山にいたと見られる。引用した史料に「二月廿四、同廿六日之一書披見候」とあり、ここでも書状を用いて情報を交換している。傍線①などから、伊豆金山は繁栄しており産出される鍔の質も良いことがわかる。傍線②では金座支配役後藤庄三郎の手代を伊豆に招いている。これは金山で産出される金をもとに、金山内で金貨をつくるためであった。後藤氏の手代は、元和八（一六二二）年には佐渡銀山にも赴いた。佐渡へ手代を招いた理由は、金を江戸へ送る際の海上輸送が不安なためであった。⁽²⁹⁾ 後藤氏の手代を金山におく事で金を輸送する必要がなくなり、傍線③から、伊豆金山の支配は「河作兵」つまり銀山奉行の川井政忠と、後に佐渡銀山奉行となる「竹九郎右衛門」つまり竹村嘉理らと、戸田藤左衛門が相談して行っていたことがわかる。

さてこの史料において、他の銀山との交流が見られる記述は傍線④である。長安は、佐渡から来た者にも良い場所を見極めて請負わせるように指示し、「山渡可被申事」とあることで、これは佐渡から来た山師、特に銀山巧者であると考えられる。慶長九年の佐渡支配の際に銀山巧者

を招いたのと同様、伊豆金山でも銀山巧者を招いて開発を促進しようとした。さらにこれより前の同年二月二十二日の長安書状では、

一、上かたよりかねほり多参候由尤候、見合候てよき所をきらせ可被申事、⁽³⁰⁾

と、上方から伊豆に金掘が多く来ているので良い場所を掘らせるようにとしている。ここには「見合候てよき所をきらせ可被申」とあり、新しい坑道を探させているようだ。このようにして伊豆金山では山師に坑道を請負わせ、かつ金掘に新しい坑道を探させて開発を促進している。続いて同十三年二月廿日の長安書状では、

一、甲州よりたかねハ参候哉の事、⁽³¹⁾

と、ここでは甲州から招いた「たかね」つまり金掘が来たかどうか確かめている。早くから金山が開発された甲州では、甲州流と呼ばれた穿鑿、測量技術が伝わっていた。⁽³²⁾ このように伊豆金山では、佐渡銀山の銀山巧者や採鉱労働にあたる人材を各地から招いて採鉱や坑道の発見を促進したが、ここで金掘を集めたために、伊豆金山の金掘と他国から来た金掘の間で稼行をめぐる争いが生じた。それについて、慶長十二年三月五日付の長安書状には次のようにある。

一、其もとへ方々より参候かねほり、此前の有付候かねほりとも申分ハ、爰元山之儀ハ何も見出し候ものうけきり候間、望ハ有ましく候、自然当国ニ執心も候ハ、志摩守殿へ理候て、いつくの山成ともほるへき由申候二ついて、方々より参候かねほり、そろ／＼ともとり候由申候、望の所いつかた成ともほらせ候へく候間、奉行ともへ其理可申由、札を立可申事、

一、此以前より有付候かねほりともミやうしき同前ニいたし、他国のかねほりいれましき様子ニ在之由申候間、可有其心得事、³³⁾

ここでは伊豆金山にいた金掘が他国の金掘を山へ入れたがらない様子であった。それは伊豆金山では間歩を発見した者がその場所を請けきつて採鉱する経営法をとっていたためである。このような問題は長安の支配下で鉱山間における移動、交流を促進したため、従来の稼行形態と対立して生じたといえよう。また、慶長十二年三月三日の長安書状には、

覚

一、三嶋請取之富右衛門間歩弥鏈出□□^(虫喰)尤候事、

一、同所彦大夫請取候間歩も不相替□□^(虫喰)敷へ入候程鏈よく候由尤候事、

一、助右衛門請取候間歩も不相替鏈出候由尤候事、

一、三嶋大横相打ち候て惣山之きおいにて候之間、弥かせき可申事、

(中略)

① 一、佐渡参より候役人、甲州より参候役人くミ合諸事申付候由尤候事、

② 一、佐渡より参候石たゞき、いたとり其表へ参候由、弥能様ニ仕組可申事、

(中略)

以上、三月三日、石見守判、戸田藤左衛門殿³⁵⁾

とある。はじめの四条から伊豆金山が好調な様子がわかる。また慶長十一年に伊豆金山見分のため、佐渡銀山から派遣された三嶋はこの時、

伊豆金山で間歩を請負っている。そして傍線①は佐渡と甲州から来た役人を、伊豆金山の支配機構に組み込んで支配にあたらせるようにとの指示であった。傍線②では、佐渡から「石たゞき、いたとり」つまり選鉱技術者が来ているので、これも適宜金山の作業行程に組み込むように、としている。選鉱とは鉱石を灰吹銀にする製錬の工程で、掘り出した鉱石から土砂を取り除く作業が行われる。ここに見える「石たゞき」は石扣と書き、掘り出した鉱石を砕いてふるいにかけて、土砂を取り除く作業を行う労働者を言う。

また、「いたとり」は板取と書き、石扣の者が砕いた鉱石を水で汰り、土と銀とを分ける労働者を指す。³⁶⁾ 佐渡銀山から選鉱労働者を招いていることと同年「水銀なかし」という新しい製錬法が導入されたことから、佐渡銀山では特に選鉱、製錬技術が進んでいたと考えられる。佐渡銀山は「掘返し地形と海の深サ均きゆゑ水湧出」と、湧水が発生しやすい地形であったよう³⁷⁾だ。そのため佐渡銀山支配を始めてから、長安は湧水対策など坑道の手入れの他、選鉱、製錬技術の向上に力を入れたのではない。さらに慶長十二年七月の、石見銀山の陣屋へあてた長安書状には「佐州豆州なども少能候と申候て頓而水まふに成」との記述があり、この頃は伊豆金山でも湧水が発生したようである。³⁸⁾

そこで選鉱技術に力を入れて産銀を向上させるために、佐渡銀山の選鉱技術者を伊豆金山へ派遣したと考えられる。伊豆金山は慶長十一年の時点で、金銀の産額が非常に多いとされていた。そのため長安は伊豆金山支配にあたり労働者を大量に集め、また鉱山技術者や役人を佐渡や甲州をはじめ方々から招いて開発を進めたのである。慶長十年代の移動を

引き起こす大きな要因には、伊豆金山の発見の他に佐渡銀山の不調もあった。この頃、佐渡銀山では坑内の湧水が深刻な問題となっており、それに伴って人々の移動が生じた。まず、当時の佐渡銀山の様子について、慶長十三年とされる相川陣屋からの書状を見る。

覚

一、爰許諸山不相替鏈出申候事、

一、相山久右衛門わり間歩、此以前之大工すくなく御座候間、百人かせいを入切せ申候節、はや治介横相之下迄参候、か様二御座候ハ、来年三月より内二大水貫へうちぬき可申と奉存候、我等共大水貫二十日番二仕、諸横相無油断申付候事、

一、向山弥次兵衛間歩不相替鏈出申候、本敷久々すたり申候ヲ新樋ヲ立、水ヲ取付申候、是より大分鏈上リ可申と奉存候事、

一、床屋水銀なかし、是も無油断申付候事、

右替儀御座候ハ、重而注進可申上候、以上、申ノ二月十四日、岩

下惣太夫、草間勝兵衛、戸田藤左衛門殿、御披露、

佐渡相川銀山内の坑道では大工を入れて坑道内の水を抜く水抜普請をしたり、「樋」と言うポンプを導入して水を汲み出しながら採鉱を行っている。このように佐渡銀山では湧水対策に苦心しており、同年には大久保長安が佐渡銀山へ渡海した。その際には、

一、拙者先祖荻野五郎左衛門、石見銀山役人ニ御座候処、大久保石

見守殿御支配之節、慶年十三申年被召出、山方役被仰付御奉公相初申候、(後略)⁽⁴⁰⁾

とあるように、長安は石見銀山の役人を佐渡の山方役とした。これも

湧水の対策など不調になった銀山の采配にあたらせるためと考えられる。このような状況の中、生野銀山からも役人が来た。これについて『生野銀山旧記』の慶長十四年の記事には次のようにある。

(前略) 同十四年佐州之奉行銀山の繕配不鍛練なれハ、間宮家来、

山方鍛練のものを指遣ハすへき旨、上意に依て、間宮が家来、田中与左衛門、小倉軍兵衛、中瀬金山の下奉行、橋本加右衛門、同十四年己酉年此三人遣ハさる、其節中瀬の山師、下原弥右衛門、向岩九右衛門、井相九助などいふもの、誘引せられて佐州へ渡るに、老ヶ年を極て帰歩す(後略)⁽⁴¹⁾

それまで生野銀山と、佐渡銀山をはじめ長安が支配する直轄領鉱山の間には支配者の意図による交流はなかった。それがここで、家康の意志によつて生野銀山奉行の間宮新左衛門の家来を佐渡へ派遣した。間宮はこれより前、生野銀山で水抜、煙抜を掘ることに成功している。⁽⁴²⁾この時「佐州之奉行銀山の繕配不鍛練」として家康が、それまで交流のなかった生野銀山から佐渡銀山へ人材を派遣した理由としては、水抜普請に成功した間宮の家臣を派遣して佐渡銀山の復活を試みたことがあげられる。

またこの時、中瀬金山の山師三名も佐渡へ渡つた(地図①参照)。中瀬金山もかつて秀吉直轄領であり、慶長五年から幕府の生野銀山奉行により支配された。つまり慶長期において中瀬金山は間宮の支配下にあつて、中瀬金山の山師達は「老ヶ年を極て帰歩」とあるように一年後には中瀬金山へ戻つた。一年後、則ち慶長十五年の佐渡銀山の様子については、

一、間山わり間歩、殊外水へり申候、近日本敷之鏈ほり可申と奉存

相かせき申候、諸横番申付候、鏈上り申候。わり間歩内よりもちや、かゝ四兵衛間歩の方へ之穴之内之よこ相、是も一段いろいろ御座候、近日もちやえつるへあい可申と奉存候事、

一、当春は何にてもことかけ不申候、御山くつろき申候、殊二間之山わり間歩新樋道、去月極月打ぬき申候てといたて申候処ニ、一段と水へり申候、はヤ・とい十九丁たて申候、かやうに御座候ハ、近日日本敷へ水とりつけ可申と存候、たゞ今も横番より過分之鏈いて申候、二月時分ニ罷成候ハ、御山一入さかり可申と奉存候、(後略)⁽⁴³⁾

とある。「殊外水へり」、「過分之鏈いて申候」とあり、坑内の水が減つて採鉱ができるようになったことがわかる。中瀬金山の山師達も佐渡銀山へ渡つて銀山復活に貢献し、翌年、佐渡銀山で採鉱ができるようになったため帰されたのであろう。このように慶長十年代の佐渡銀山では、湧水が発生し、その対策のために鉱山支配者は各地から役人や山師を佐渡へ派遣した。逆にこの時、佐渡銀山を出る者もあつた。それは各地で発見された新たな鉱山へ向う鉱山労働者達である。これについて『当代記』には次のようにある。

(前略) 奥州南部に有「金とて、金鑿共彼山江自「佐渡国」相下、始は無「際限」出けるか、壘而出止、又金鑿共松前江下、松前之主彼地兵糧乏間、已来飢饉兆なりとて不「能」許容」と云々、(後略)⁽⁴⁴⁾

佐渡銀山の不調をうけて、同山の金掘達が南部や松前へ向つたのである。この頃、東北地方を中心に新しい鉱山が相次いで発見された。この時発見された南部の金山は鹿角郡のものであるという。⁽⁴⁵⁾ これより前の慶

長十一年には院内銀山が発見され、翌年には院内銀山の運上を駿府に献上している。⁽⁴⁶⁾ 新しく発見された東北地方の金銀山に佐渡銀山の鉱山労働者が渡ること、佐渡の技術が新鉱山に伝わったのである。本項で見た移動から、佐渡銀山は重要な鉱山で、その技術も進んでいたことが窺われる。また慶長十年代に銀山間における移動が活発になったが、中でも大きな移動を引き起こしたのは、長安の伊豆金山支配と佐渡銀山の不調であつた。そしてこの時期には特に鉱山支配者の意図に基づく人材派遣が多かつたのである。

三 技術伝播と移動

鉱山開発や技術の伝播、交流は鉱山間における移動の意義のひとつである。本項では鉱山技術の伝播と移動の関わりについて検討する。ここでは十六世紀に石見銀山へ導入された灰吹法、そして慶長十年代の史料に見える「水銀なかし」の二つの製錬技術を取り上げて、それらが伝播する際の移動の形態に注目してみたい。

まず灰吹法は、砕いた鉱石に鉛を混ぜて加熱することで銀を抽出する方法である。この方法は銀だけではなく、金や銅の製錬にも応用された。灰吹法は元々中国や朝鮮で行われていた製錬法であり、日本では中世における対明、対朝鮮貿易の拠点である博多で行われていたと見られ、それに関して『石見国銀山旧記』には次のようにある。⁽⁴⁷⁾

(前略) 神谷三島相供に大永六丙戌年三月廿日、三人の穿通子吉田與三右衛門、同藤左衛門、於紅孫右衛門を引連て、銀峰山の谷々に

て石を穿ち、地を堀て大に銀を探り、寿亭皆収め取り九州に帰けり。是よりして石見国馬路村の灘古柵鞆岩の浦へ商人船多く来り、銀の鏈を買取て寿亭が家大に富み、従類広く栄へけり。(後略)

これは大永六(一五二六)年、博多商人の神谷寿禎、出雲の鷺浦銅山主の三嶋清右衛門らが石見銀山を発見した記事である。ここで銀山を発見した寿亭は、石見銀山の鉱石を博多へ持ち帰り、製鍊したところ銀が含まれていることを知った。その後、傍線部のように博多の商人と見られる者達が石見銀山へ鉱石を買い付けに来たとある。ここから当時、輸出の銀や銅鉱石は鉱山から博多へ運ばれ、博多で製鍊されていたことがわかる。つまり採鉱と製鍊が遠く離れた場所で行われていたのである。それが天文二(一五三三)年、

(前略) 此年寿亭博多より宗丹桂寿と云ものを伴ひ来り、八月五日相談して鏈(割註 銀と石と相雜ものを鏈と云)を吹熔し、銀を成す事を仕出せり、是銀山銀吹の始り也、(後略)

と、寿禎は朝鮮人とされる二名の吹工を石見銀山へ伴って来て製鍊を行った。⁽⁴⁸⁾これにより掘り出した鉱石を博多まで運ばずに銀山領内で灰吹銀にすることが可能になり、銀生産の効率も上がった。その後、灰吹法は石見銀山から各地の銀山へ伝わった。まず生野銀山の場合は、『生野銀山旧記』に次のようにある。

但州朝来郡生野銀山之濫觴を尋るに、天文十一年壬寅八月上旬、小城山之南表に銀石初て堀出すを蛇間歩と号し(中略)然に蛇間歩里人は是を堀出す、然りといへ共、銀に成事を知す、然りし所に石州の人来り、此石を求めて、石州に於て吹所に大分銀あり、別此者石州

より金堀、下財、金吹をかたらひ来りて、今の御立林の内、所々に間歩を開く、山神の上より東堂ヶ谷、伍右衛門間歩、皆此節の山なり(後略)⁽⁴⁹⁾

これは天文十一年の生野銀山発見の記事であって、石見の者が生野へ来て、古城山の南表で発見された銀鉱石を石見銀山へ持ち帰って製鍊した。その結果、多分の銀が含まれていることが判明し、石見銀山から採鉱労働者、そして「金吹」つまり製鍊技術者が生野へ赴いた。ここで天文二年に石見銀山に導入された灰吹法が生野銀山へも伝わった。しかし当時銀山を領有していた山名祐豊が製鍊の際に生じる悪臭を嫌い、生野銀山領内における製鍊を禁止した。その後、銀山を支配した太田垣氏もその方針を受継いだため、製鍊は丹波や播磨に鉱石を運んで行われた。⁽⁵⁰⁾続いて佐渡銀山への灰吹法伝播について、『佐渡年代記』の鶴子銀山発見の記述を引用する。

一、鶴子銀山は天文十一年、越後の国の者来りて、土地の者と計り、澤根の地頭本間摂津守に訴へ、運上銀百枚を出して銀山を稼ぐ、(中略)又本口といふ間歩は文祿四年五月廿四日、石見の国の者三人(割註 忠左衛門、忠次郎、忠兵衛)来りて初て稼くと云、⁽⁵¹⁾

佐渡銀山には文祿四(一五九五)年、石見銀山から忠左衛門らが渡つて稼行した際に灰吹法が伝わったと考えられる。このように灰吹法は、まず石見銀山において導入、定着し、その後、生野や佐渡銀山をはじめ各地の銀山に伝播した。灰吹法は鉱山発見の目的で移動していた石見銀山の山師達が、自主的に各地へ移動することで伝わっていった。

慶長十年代に入ると、佐渡銀山と伊豆金山で新しく「水銀なかし」という製錬法が試みられる。「水銀なかし」については、灰吹法のように手順を記した史料が残されていないため、その詳しい方法については明らかでない。しかし現在ある史料と先行研究から、水銀を用いた費用の安い製錬法であるといえる。「水銀なかし」に関する研究は小葉田淳氏⁽⁵²⁾のものがはじめであり、同氏は大正年間に川上家の古屏風の裏張から発見された、全部で二十枚ずつ三冊に分綴した文書をもとにして研究を行った。この文書は、慶長十二年「御前江言上留書」、慶長十五年「御前言上留書」、「御前江上ヶ申跡書」の三冊で、その内容は草間内記、岩下惣太夫ら相川銀山陣屋の役人と、伊豆にいる長安家老の戸田藤左衛門の間における銀山支配に関する連絡である。年代は慶長十二年から十八年のものであるが、年代を追って綴じられた文書ではなく、そのために書状の年次が前後していたり、内容が途中で切れているなど不完全なものもある⁽⁵³⁾。

小葉田氏はこの史料に見える「水銀なかし」をメキシコの銀山で行われていた水銀アマルガム法であるとした。水銀アマルガム法とは砕いた銀鉱石に食塩、硫酸銅、水銀を混ぜて銀のアマルガムを作り、そこに水銀を加えて水とともにかき混ぜて岩石を洗い去り、アマルガムを蒸留して銀と分離する方法である。これは灰吹法と比べて設備が簡単であり、また燃料費も要しないために経費も安く抑えられるという。このような小葉田氏の見解に対し、西尾銈次郎氏は「水銀」は砂金をさすとして反論した。しかし、「水銀なかし」について具体的に記述した史料が見つかっていないため、実際はどのような製錬法であるのか明らかではない。

しかし先行研究の業績と、慶長十二年「御前江言上留書」のように現在ある史料をもとに、技術伝播という視点から「水銀なかし」の導入を考えてみたい。まず慶長十二年「御前江言上留書」には、「水銀なかし」に関して次のような記述がある。

一、床屋御所問吹立念ヲ入申付候、殊ニ水銀なかし過分ニ勘定いたし見申所ニ、過分ノ御徳まいり候間、本ノ床屋ヲやめ、水銀床ヤか、かいふ口木立ノ上ニ立申候、わきノ衆もこれを承、皆々水銀床屋ニ可致由申候て、伊セノ与右衛門、宗徳などハ、はやなかし申候事、(中略)

十一月十五日、岩下惣太夫、草間内記、戸田藤左衛門殿、御披露、ここで初めて、佐渡銀山において「水銀なかし」を試みたと考えられる。「水銀なかし」は灰吹法と比べて格段に「御徳」、つまり経費が安い⁽⁵⁴⁾ため、陣屋では相川町の床屋を全て水銀床屋にするようにと導入をすすめている。また同じ史料の別の記事では、

一、水銀床ヤ之儀、切々見廻申候て、万ゆんなき様ニ申付候事、
一、山なかい石仕候者共、水銀入次第御かし可被成候由、則申聞候、
みなノ忝候由申候間(後欠)⁽⁵⁵⁾

これは「水銀なかし」に必要な水銀の供給に関する記事である。傍線部の通り、「かい石」つまり製錬業者に対して、水銀は必要なだけ陣屋から供給された。この点から「水銀なかし」は長安の意図で導入されたものと見ることができる。また「水銀なかし」は水銀を用いた製錬法であり、製錬費用が格段に安いという性質を持つこともわかる。この点で水銀アマルガム法と共通した性質を持つ。しかし、慶長十四年にイSPA

ニア人ドン・ロドリゴの船が日本に漂着した際、家康はロドリゴに対して鉱山技術導入のために鉱夫の派遣と水銀の調達に関する交渉をした。またロドリゴは、日本の鉱山には水銀、及びそれを用いた技術がないにも関わらず、産額は驚くほど多いとしている。これらの点から、水銀アマルガム法は日本に伝わっていないのではないか。この事と先行研究の業績から、慶長十二年に佐渡で行われた「水銀なかし」とは、水銀アマルガム法に関する知識をもとに試みた方法、つまりアマルガム法を模倣した製錬法と考えられる。ここでは「水銀なかし」をそのように解釈して考察を進める。そして翌年、「水銀なかし」は伊豆金山でも実施され、慶長十三年二月二十日付長安書状には、次のような記事が見える。

一、二三ヶ年佐州の仕置見申候間、其通可申付事、

一、さいせんも申越候、水かねてくさりのしわけ様この比いたし出し候間、上々のくさりとハ其まゝをき可申候、つねの上くさりばかりいつものことくこしらへさせ可申事、

ここでは、性質が「上々」の鉱石は灰吹法で、そして「つねの上」の鉱石は「水銀なかし」で処理している。伊豆金山では「水銀なかし」の性質を活かして、鉱石の質によって製錬法を使い分けている。つまり製錬しても採算は取れるが、灰吹法で処理すると比較的費用のかかる鉱石を水銀なかしで処理することで、費用を節約しようとしているのである。この他、「水銀なかし」に関する史料に、慶長十五年「御前言上留書」があり、これには、

一、日外も申上候、上相川茶ヤより之水、六十枚之水、京町筋へ取申候水、過分ニ参候処、何も水かね流仕ニ付て町中無其動盛申

候、其水京町筋、又、左門町、床屋町、四十物町、米や町、其外町中へ参候ゆへ何も水かねなかし仕候事、

とある。ここで「水銀なかし」が相川町内で本格的に行われている様子、そしてそれによって「町中無其動盛申候」と、町が繁栄している様子が分かる。これは銀山の復活に加え、費用が安い「水銀なかし」の効果でもあると言える。慶長十年代の佐渡銀山では水抜普請や御直山経営のため陣屋の出費が増えていた。そこで十分一役所において、入津する船に役銀をかけたり、町中で運上を徴収した。慶長十年代には相当重い運上がかけられていたようである。それは慶長十八年の長安死後、間宮新左衛門が佐渡銀山の支配を引き継ぐことになり佐渡へ渡海した際、「諸人困窮」の様子を見て間宮が公納金や運上を免除したところ、「人々喜悦」したと言う『佐渡年代記』の記事からも判明する。このような運上をかけたのは支出が多かったためであるが、慶長十年代の佐渡銀山のように銀山経営が厳しい状況において、製錬費用が安い「水銀なかし」は効果的であった。

「水銀なかし」の定着と銀山の復活により、慶長十五年の佐渡銀山には再び人が集まってきた。つまり佐渡銀山では、前述したような選鉱、製錬技術の改善、そして経済的な面から「水銀なかし」は有効な方法であったのである。ここまで、慶長期に行われていた二つの製錬技術について考察してきた。最後に技術の普及と移動の関係についてまとめておく。灰吹法も「水銀なかし」も、はじめは何らかの目的で意図的に導入された。灰吹法はその後、石見銀山の者が移動することによって生野、佐渡銀山をはじめ各地の鉱山へ伝播していった。そして灰吹法は全国に

伝わり、近世における基本的な製錬法となった。

しかし「水銀なかし」は慶長期の一時に佐渡銀山、伊豆金山で長安によつて試みられただけで、鉾山労働者による伝播は確認できない。また同じ直轄領である石見銀山では「水銀なかし」が行われていない。ここから「水銀なかし」は何らかの理由があつて佐渡、伊豆金山以外には導入されず、また慶長期以降は行われなくなったのであろう。⁽⁸⁰⁾

四 鉾山領内の実態と諸問題

鉾山では技術交流や労働力の調達のために移動は不可欠である。しかしそのために様々な問題も生じ、例えば慶長十年代の院内銀山では、

一、抑銀山日を追て繁昌すれば、西国・南海・北陸・中国・東海・

東山の者聞伝へ／＼馳下けるに（中略）毎日／＼喧嘩口論たゆる事なく、狼藉人を害し、盜賊・強盜の類ひまもなく、獄屋に關もなければ、壹ヶ月に六度の牢払の日を定め、罪科の輕重を糾明し、斬罪、はりつけ、火あふり等の場を定めしに、骸骨山を積み草木紅波を流す（後略）⁽⁸¹⁾

とあるように、銀山開坑に伴い領内に各地から人間が集まつてきて治安が悪化した。前節で見たように、慶長期の直轄領鉾山でも移動を促進する政策のもとで鉾山が盛んに下降され、人が多く集まっていた。そこで本項では直轄領鉾山内の実態として、人間の出入の様子とそれに伴つて生じた問題について検討する。

まず、鉾山労働には山師や金掘などの鉾山に関する専門的な技術を持

つ者たちの他に、百姓や町人も携わっていた。彼らは荷揚げ子や坑道内の水揚げ作業など、特別な知識や技術を要しない単純労働を行っていた。

鉾山では常に銀を得られるために出稼に赴く百姓も多かったのである。特に佐渡銀山へは、近隣諸藩から多くの百姓や町人が出稼に集まり、それに関して慶長十年八月二十八日付の堀秀治書状を引用する。⁽⁸²⁾

急度申遣候、仍泊百姓過半佐渡嶋へ相越、家を明有之由、沙汰之限候之条、早々可召帰候、於由断者百姓一類成敗可申付候、然者これ落候家など取立可申候、則米地子口之内を以参拾石令扶助当座之儀候間、当年迄算用可相立候、謹言、

慶長拾年八月廿八日

秀治（花押）

大津理右衛門殿

三上吉兵衛殿

堀秀治は越後国春日山城主で、越後一國、四十五万石を領有していた。引用した史料からすると、百姓が大勢佐渡銀山へ渡ったこと、そしてそれにより堀氏の領国内では村落崩壊が生じたようだ。他國への銀山稼ぎを禁止する法令は、これより前の慶長七年に加賀藩で、同九年には加賀藩と米沢藩で出されている。⁽⁸³⁾ 慶長七年、九年、十年はいずれも佐渡銀山が盛んに稼行されていた時期であり、そのために近隣諸藩からも大勢の百姓や町人が銀山へ出稼に行つたのである。しかし加賀藩をはじめ近隣諸藩の領主は、出稼が村落崩壊の原因になるためにこうした出稼を禁じた。

また移動に伴う問題として、鉾山労働者の逃亡や鉾石の持ち出しもあげられる。これに関してまず、年末詳二月、御手大工訖証文には、

味方但馬様ノ御手大工ニ、うしの五月より入申候所実正也、^①うしノ八月より山をほり不申候て、はしり申候所ニ今度御見つけ候ハ、御きうめい被成候所ニ、角右衛門、与市御わひ事申候て、御ゆるし被成候事、忝存たてまつり、其上、^②右之かり申候銀、但上銀合四拾六匁五分ハ来る二月六日きつ度相済可申候、若ふさた仕候者、請人きつ度相済可申候、其上何かと申候者、いか様ニも御きうめい可被成候、其時一こん御うらミ申間敷候、為後日仍如件、とらノ二月四日、かり主 新五郎印^③

傍線①で、佐渡の味方但馬の御手大工が役目を果さずに逃亡したこと、また傍線②から借銀四十六匁五分を返さずに逃げたことがわかる。このように役目を放棄したり、借金を返さずに山を去る鉱山労働者も出た。続いて労働者による鉱石の盗掘や持ち出しについて、慶長十年代の佐渡銀山の場合は、

(前欠) 番ヤを作り定番立申候、平より水銀床ヤノウへ、又セリはへ各辻ニ一ヶ所、上間之山岩崎セリはへいて申候所ニ一ヶ所、六十枚之谷のかしらよりあほのへ通申候所ニ一ヶ所、定番被置申候間、以来ハ弥鍵ぬけ申間敷候事、^④

一、鍵ぬけ道夜待之儀、無油断出し申改申候、ロヤより外ニも忍申候て目付之者置、若ロヤ鍵持出候者御座候へハ改申候、諸事油断ニ不存候、相替儀御座候は、重而可申上候、以上^⑤

とあり、この史料から鉱石の持ち出しは多く見られたと考えられる。その対策として番屋を設置して注意をさせていたのである。また伊豆金山でも慶長十二年二月二十二日の長安書状に、

一、豆州一國方へ目付をまハし、盗ほりいたし候哉、見せ可申事、^⑥とあり、伊豆一國中で鉱石を盗掘した者がないかを調べた。鉱石の盗掘、持ち出しは鉱山にとって損失になるため、選鉱所の近くや銀山へ出入りする交通の要所に番屋を置いて取り締まっていた。

さらに鉱山には駆落人が逃亡するようになった。これについてまず『梅津政景日記』慶長十七年八月七日の記事を引用する。

一、越後出雲崎代官太田久兵へと申人之内、依田孫左衛門小者作内、同所之町新藏と申者、當山へかけ落候て、去年参候由、是ニ付而、右兩人より飛脚参候、則其ものを先立、山中相尋候へハ、作内見付、からめ取、籠者致候、新藏事、作内ニ尋候へハ、去年同道致参候へ共、則より何方へか罷越候由、作内申候、(後略)^⑦

これは越後出雲崎代官の小者と同地の町人が、院内銀山へ駆落ちした記事である。この他、同年八月十二日にも「大津弥右衛門内越後の宗七と申もの」が院内銀山へ駆落ちした。作内、宗七はいずれも越後へ返された。^⑧彼らは何らかの理由で出奔したものと考えられるが、その逃亡先として鉱山が想定されているのであり、ここから支配体制の秩序からはみ出した者が各地の鉱山に流入する危険性があつたのである。徳川氏直轄領鉱山の場合、駿府に最も近い伊豆金山の支配は特に注意を要した。それは伊豆金山が旧豊臣方の者が多い上方に近いことに加え、家康も伊豆金山にしばしば逗留していたためである。家康の伊豆金山逗留について、例えば慶長十二年二月廿二日付の長安書状には、

一、上様駿府へ 御成も来廿九日と被仰出候間、其中ハ逗留候て尤

由何も被仰候間逗留候事、⁽⁷⁾

とある。引用部の「上様」は家康を指すが、この時の御成は『当代記』巻四で確かめられる。それによると家康は、二月二十九日に江戸を発ち、相模国中原で鷹狩をして駿府へ向かったようだ。⁽⁸⁾ 長安の書状には「其中ハ逗留候て尤由」とあることから、家康が駿府に来る際は伊豆金山に逗留することが多かったと言える。この他にも長安書状には家康御成の途中の居場所と、それに応じた長安らの動きに関する記事が多くあるので、伊豆金山は家康が駿府に御成の際の中継地点であったと考えられる。そのため慶長十二年三月二日付の書状で長安は、

一、其元の儀、万事駿府ちかく候間、仕置かんよう候、佐州、石州
など之相替候間、可致其心得候事、⁽⁹⁾

と書いている。駿府に近く、家康もよく逗留するという点で、伊豆金山は佐渡や石見銀山とは異なる重要性を持っていたので、支配は特に注意を要したのである。また慶長十年代には長安の伊豆金山支配政策により、労働者や商人が大勢伊豆金山へ集まっていた。そのために、

一、御前ニては、あきないふねも参、上かたよりも商人衆も多致上
下之由、毎日毎夜取沙汰ニ候間、無由断様ニ可申付候事、⁽¹⁰⁾

と、ここでは上方から伊豆金山に来る者に対して注意を促した。これは旧豊臣方の者が商人にまぎれて金山へ入りこみ、騒動を起こすことを警戒したものであろう。徳川氏の鉱山支配政策のもとで、直轄領鉱山では稼行が盛んに行われた。それにより労働者以外にも、出稼の百姓や町人、物資供給に携わる商人など多くの人々が鉱山に集まった。しかし、そこで鉱石の持ち出しや労働者の逃亡といった問題も生じた。特に近隣

諸藩における村落崩壊や駆落人の鉱山流入は、支配体制にも影響を及ぼす深刻な問題であった。人の出入りが常に生じる鉱山の性質は、支配体制の秩序の維持と対立する面も持っていたのである。

おわりに

以上、本稿では、慶長期の徳川氏直轄領鉱山における人間の移動の実態について考察してきた。この時期の移動の特徴としては、十六世紀に見られたような鉱山労働者の自主的な移動に加え、家康や長安の意志に基づく鉱山間での人材派遣があげられる。慶長期には複数の直轄領鉱山の間において各鉱山の陣屋と長安、及び家康と銀山奉行が相互に鉱山の状況を報告しながら鉱山支配にあたっていた。ここで鉱山間における連絡の往来や、鉱山調査、下見のための移動が生じた。

実際の鉱山支配にあたっては、各鉱山の状況に応じて適宜、技術者や役人を鉱山間で往来させていた。さらにこのような人材派遣の他に、鉱山労働者の自主的な移動も促進して開発をすすめた。また技術伝播においては「水銀なかし」の導入のように、支配者の意図に基づくものも見られた。移動を促進して稼行が盛んに行われるようになると、鉱山には様々な人間が流入するようになった。ここで大工の逃亡や鉱石の持ち出しなど鉱山支配の秩序に関わる問題のほか、駆落人の鉱山流入など支配体制の秩序にも関わる深刻な問題も生じた。その中には、大坂に豊臣氏が存在していた慶長期の伊豆金山において上方からの人間の流入に注意をさせるなど、豊臣氏との関係に伴う問題もあった。

最後に本稿で考察できなかった点および今後発展させるべき点についてまとめておきたい。まず慶長期以降、つまり大久保長安、間宮新左衛門の死後の鉾山支配方法、及びその時期に見られた移動の実態と特質、そしてその目的について考える必要もある。例えば元和年間の場合、石見銀山は竹村丹後守が、佐渡銀山はその弟の九郎右衛門らが支配した。元和四年には石見銀山から佐渡銀山へ役人が一名「鎮目市左衛門殿、竹村九郎右衛門殿より石見銀山御支配竹村丹後守殿江被仰遣」たことで派遣された⁽¹⁵⁾。このように直轄領鉾山は、慶長期以降も相互に関係を持ちながら支配されていたと言えよう。しかし同七年に佐渡銀山奉行の竹村九郎右衛門が生野銀山へ派遣されるなど、慶長期とは異なる支配形態も見られた。⁽¹⁶⁾このように、慶長期以降の移動との特徴も考えることで、近世初期の徳川氏の鉾山政策、そしてそこで生じた移動について捉えることが可能になる。

さらに慶長期の直轄領鉾山では、甲州、佐渡銀山の人材が他の鉾山に派遣されることが多いようである。それはこれらの鉾山の技術が他よりも優れていたためと考えられる。そこで、佐渡、甲州金山の技術はどのような点が優れていたのか。そして、技術が発達した背景についての考察も必要である。さらに「水銀なかし」の伝播に見るような支配者の意図に基づく技術伝播についての検討も必要である。このような中世から近世初期における技術伝播に関する問題も残っている。以上の点については今後の課題としたい。

註

(1) 鉾山史全体の研究として、小葉田淳『日本鉾山史の研究』(岩波書店、一九六八年)、『続日本鉾山史の研究』(岩波書店、一九八六年)がある。個別の鉾山に関しては、代官頭の大久保長安から石見、佐渡銀山を見た村上直氏の「近世初期における石見銀山の支配―大久保石見守長安を中心に―」(『駒沢女子短期大学研究紀要』二号、一九六八年)、「近世初期石見銀山の支配と経営」(『徳川林政史研究所研究紀要』昭和五十三年度、一九七八年)などがある。他に佐渡銀山の総合的な研究である麓三郎氏『佐渡金銀山史話』(三菱金属鉾山株式会社、一九五六年)、田中圭一氏『佐渡金銀山の史的研究』(刀水書房、一九八六年)など、慶長期の直轄領鉾山に限ってみても多くある。

(2) 鉾山への物資供給に関する研究としては和泉清司氏「近世初期佐渡金山支配にみる相川町の形成と周辺諸藩」(『日本水上交通史論集』第一巻、一九八六年)、小村式氏「西廻海運成立以前の米穀流通機構について―越後と佐渡を中心に―」(『福尾武市郎編『内海産業と水運の史的研究』吉川弘文館、一九六六年)などがあげられる。

(3) 鉾山町を中心とした研究には、山口啓二氏「近世初期秋田藩における鉾山町」(『国民生活史研究』二、一九五九年)、川崎茂氏『日本の鉾山集落』(大明堂、一九七三年)、田中圭一氏『帳箱の中の江戸時代史下』(刀水書房、一九九三年)などがある。

(4) 『石見国銀山旧記』(『近世社会経済叢書』第八巻、二〇一頁)

(5) 村上直「近世初期、甲州系代官の系譜について―武田蔵前衆を中心に―」(豊田武先生古稀記念会『日本近世の政治と社会』吉川弘文館、一九八〇年)

(6) 『生野銀山旧記』慶長三年(『日本鉾山史料集』第一期近世編⑤、四五頁)

- (7) 『寛政重修諸家譜』卷第四三三(『寛政重修諸家譜』第七、二五三頁)
 (8) 『寛政重修諸家譜』卷第一一七一(『寛政重修諸家譜』第十八、六七頁)

(9) 慶長四年二月七日佐世石見守書状(『吉岡家文書』村上直他編『江戸幕府石見銀山史料集』七一頁)

(10) 『石見国銀山旧記』(前掲書、一九九頁)

(11) 『吉岡家文書』(前掲書、八三頁)

(12) 『佐渡年代記』卷之一、慶長八年(『佐渡年代記』上巻、四頁)。本稿では、佐渡郡教育会編『佐渡年代記』上巻(臨川書店、一九七四年)のものを用いる。

(13) 『吉岡家文書』(前掲書、一〇六頁)

(14) 『佐渡風土記』(『大日本史料』十二編之一、七八一頁)

(15) 『佐渡年代記』卷之一、慶長九年(前掲書、六頁)

(16) 延享三年四月「諸役人先祖書」(『新潟県史』資料編九、九八頁)

(17) 延享三年四月「諸役人先祖書」(前掲書、一〇二頁)。例として保科喜右衛門の記述を次に引用する。

一、拙者先祖保科喜右衛門、慶長九辰年大久保石見守殿被召連、同十五戌年迄七十年代官職相勤罷在候处、病身ニ罷成、為養生引籠、甲州より倅八才ニ成候ヲ呼寄、十一才之時慶長十九寅年、田辺十郎左衛門殿御支配之節被召出御奉公相勤、拙者迄五代当寅年迄百三十三年御奉公相勤申候、以上、

一、先祖保科喜右衛門武田勝頼ニ奉公仕、天目山より御遺物御菩提所恵林寺へ持参候節、由緒御座候而御腰指之御旗被下候、天正十一年未年権現様遠州浜松之於御城被召出、由緒被為聞召上、御朱印被下置候、右両様とも只今ニ置奉所持候、

延享三年寅四月、保科喜右衛門

このように「諸役人先祖書」は、延享三年時点での先祖の名、奉公開始年とその時の支配者名、出身国、奉公の代数、年数を記した史料である。

(18) 『佐渡年代記』卷之一(前掲書、七頁)

(19) 味方但馬は江州三方郡の出身とされている。また同じく御直山を請負った山師の杉針右近は備中の鉛山師であった(『佐渡風土記』慶長九年「山仕次第」『大日本史料』十二編之二四七六―七七頁)。彼は慶長八年に吉岡出雲に伴われて佐渡へ来た(田中圭一「石見銀山発見の伝説」『日本歴史』五九六号、一九九八年)。ここから銀山巧者は各地の鉱山から有能な山師が集められたと見られる。

(20) 前掲、田中圭一「佐渡金銀山の史的研究」

(21) 『吉岡家文書』(前掲書、九五―六頁)

(22) 『石見国銀山旧記』「銀山稼方取扱」には、堀子について「鏈所又は寸法切と申、鏈無之場所をも穿ち候者を堀子又は銀堀と申候」とある。手子については「堀出候鏈并に柄山跡へ取直し、岡へ鉄子先懸に出、次に参候堀子呼に出候を手子と申候。尤も十歳前後の子供を遣り申候」とある(前掲書、二〇一頁)。

(23) 「草見立史料」(田中圭一「佐渡金銀山の史的研究」付録史料一、四六四頁)

(24) 『佐渡年代記』卷之一、慶長九年条(前掲書、八頁)

(25) 『慶長見聞録案紙』(『大日本史料』十二編之三、八九二頁)

(26) 延享三年四月「諸役人先祖書」には、三嶋惣左衛門について「先祖惣左衛門、伊豆国銀山惣支配役、権現様被仰付、御切米百俵被下相勤申候处、大久保石見守殿当国銀山御取立ニ付、先祖惣左衛門儀佐州江被遣、金銀山場所見立可申由ニ而当国江罷越、金銀山支配相勤申候」とある(前掲書、一一六頁)。

(27) 『新潟県史』資料編十、一九頁

(28) 『寛政重修諸家譜』卷第九八三(『寛政重修諸家譜』第一五、三二六頁)

(29) 「戸田藤左衛門所藏文書写」(大野瑞男「大久保長安の新史料」『東洋大学文学部紀要』第四一号、一九八七年)。本稿で引用する「戸田藤左衛門所藏文書写」の長安書状は、いずれも戸田藤左衛門に宛てた大久保長安の書状である。

(30) これについて、『佐渡年代記』巻之一、元和七年条には「是迄は筋金を江戸へ出し、小判に引替、佐州へ下し御入用に相成る所、海上無心元候間、後藤庄三郎手代を佐州へ呼寄、小判為仕立候様可仕哉」とある(前掲書、三四頁)。

(31) 「戸田藤左衛門所藏文書写」(前掲論文)

(32) 「戸田藤左衛門所藏文書写」(前掲論文)

(33) 萩原三雄「甲州金山における中世と近世」『山梨考古学論集』Ⅲ、一九九四年)。その他、甲州金山の研究には小葉田淳氏「日本鉱山史の研究」のほか、黒川金山衆に関する研究である桜井英治氏「金掘と印判状―甲州黒川金山衆の近世化をめぐって―」(石井進編『中世をひろげる―新しい史料論をもとめて―』吉川弘文館、一九九二年)、甲州黒川金山をはじめ中、近世に稼動していた各地の鉱山で選鉱に使われた鉱山臼の形態を分析した今村啓爾氏「鉱山臼からみた中、近世貴金属鉱業の技術系統」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』九、一九九〇年)などがある。

(34) 「戸田藤左衛門所藏文書写」(前掲論文)

(35) 「戸田藤左衛門所藏文書写」(前掲論文)

(36) 「ひとりあるき」(田中圭一『佐渡金銀山の史的研究』付録史料十一、六一七―一八頁)。「ひとりあるき」とは幕末の佐渡銀山の技術について解説した史料で、採鉱、選鉱、製錬技術などに関する記述がある。

(37) 『佐渡年代記』慶長十三年条、ここで註記として、史料中の「堀返」は「堀込」の誤りであり、金銀山敷内を指すとしている(前掲書、一一頁)。

(38) 慶長十二年七月十七日、大久保長安書状(「高橋家文書」村上直他編『江戸幕府石見銀山史料』一一九頁)

(39) 慶長十二年「御前江上ヶ申跡書」『新潟県史』資料編九、二二六―二七頁)

(40) 延享三年四月「諸役人先祖書」(前掲書、一〇四頁)

(41) 『生野銀山旧記』慶長十四年(前掲書、四八頁)

(42) 『生野銀山旧記』には「生野加奉中、曲事有に依て各極られ籠舎せしむべき其答を有し、料代として不動瀧より水抜の烟出し切らしむ、依之籠間歩といふなり、不動瀧より烟出し抜合風能通り堀切へ抜て、堀切より出賀、川戸へ抜、如此水烟ともに自由なれハ、此山々共盛る事弥増なり」とある(前掲書、四七―一八頁)。このように間宮が生野銀山の加輩つまり役人に料代として掘らせた水抜、煙抜により、銀山が繁栄したことがわかる。

(43) 慶長十五年「御前言上留書」『新潟県史』資料編九、二二九頁)

(44) 『当代記』巻四『史籍雜纂』第二、一一四頁)

(45) 「南部家譜」『大日本史料』十二編之五、慶長十三年四月是月、五二

五頁)

(46) 『大日本史料』十二編之五、慶長十二年是歳条、二八三―一八六頁)

(47) 『石見国銀山旧記』(前掲書、一九七頁)

(48) 『石見国銀山旧記』(前掲書、一九七頁)

(49) 『生野銀山旧記』天文十一年(前掲書、四二頁)

(50) 『生野銀山旧記』(前掲書、四二頁)

(51) 『佐渡年代記』巻之一(前掲書、二頁)

(52) 小葉田淳「日本鋳業史に及ぼせる西洋技術についての新発見」(『日本歴史』五五号)のち同氏『金銀貿易史の研究』(法政大学出版局、一九七六年)に収載。

(53) 小葉田氏前掲論文『金銀貿易史の研究』二二九―四〇頁

(54) 慶長十二年「御前江言上留書」(『新潟県史』資料編九、一二七頁)

(55) 註(54)に同じ

(56) 『ドン・ロドリゴ日本見聞録』には「其土地は金銀に富み、若し鑛夫及び水銀あらば更に多量を収むべし」、(ドン・ロドリゴ日本見聞録)村上直次郎訳注『異国叢書』九六頁、「銀の鑛脈及び鑛山多く、日本人は銀の精錬の技術に熟せざるに拘はらず、驚くべき多額の産出あり」(同一一三頁)とある。

(57) 「戸田藤左衛門所蔵文書写」(前掲論文)

(58) 慶長十五年「御前江言上留書」(前掲書、二二九頁)

(59) 『佐渡年代記』巻之一(前掲書、一六頁)

(60) 田中圭一氏は、水銀なかしが行われなくなった原因として、慶長十五年の朱座設置により水銀が調達できなくなったことをあげている(『初期アマルガム法の導入と家康の貿易政策』『日本歴史』五〇一号、一九九〇年)。

(61) 「院内銀山記」(『日本庶民生活史料集成』第十巻、五〇五頁)

(62) 『新潟県史』資料編九、一七七頁

(63) 小葉田淳「鋳業」(児玉幸多編『体系日本史叢書、産業史Ⅱ』一六四―一六五頁)

(64) 『新潟県史』資料編九、二八四頁

(65) 慶長十五年「御前江言上留書」(前掲書、二二九頁)

(66) 「御前江上ヶ申跡書」(前掲書、二二二頁)

(67) 「戸田藤左衛門所蔵文書写」(前掲論文)

(68) 東京大学史料編纂所『大日本古記録 梅津政景日記』(一)、八六頁

(69) 『梅津政景日記』慶長十七年八月十二日には越後の宗七が院内銀山へ駆落してきた。宗七は院内銀山で籠舎となったが、越後へ帰された(前掲書、九二頁)。また翌十三日には越後出雲崎代官の小者作内が越後へ帰された(前掲書、九二頁)。

(70) 「戸田藤左衛門所蔵文書写」(前掲論文)

(71) 『当代記』巻四『史籍雜纂』第二、一〇〇頁

(72) 例えば慶長十二年三月二日、長安書状には「一昨晦日ニ 上様江戸御立候、我等も即よこ山まで参候、上様小田原御立候時分こゝもとをたち可参候間、可有其心得事、日限ハかさねて以飛脚可申事」、同年三月三日長安書状には「大御所様中原 御立次第早々其表へ可参事」とある。このように長安は駿府御成の家康の動きに関する指示を伊豆金山にいる戸田藤左衛門に出している(「戸田藤左衛門所蔵文書写」前掲論文)。

(73) 「戸田藤左衛門所蔵文書写」(前掲論文)

(74) 慶長一三年二月二十日付長安書状「戸田藤左衛門所蔵文書写」(前掲論文)

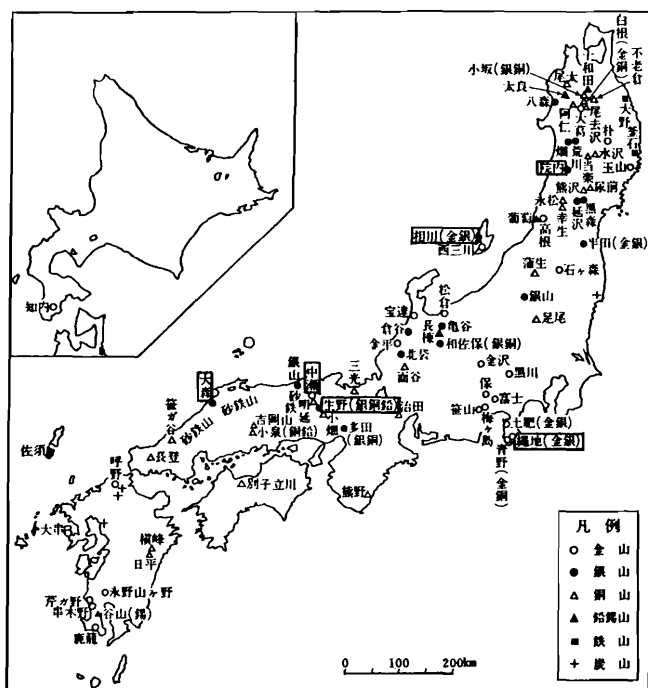
(75) 延享三年「諸役人先祖書」(前掲書、一一〇頁)

(76) 『生野銀山旧記』(前掲書、五二頁)

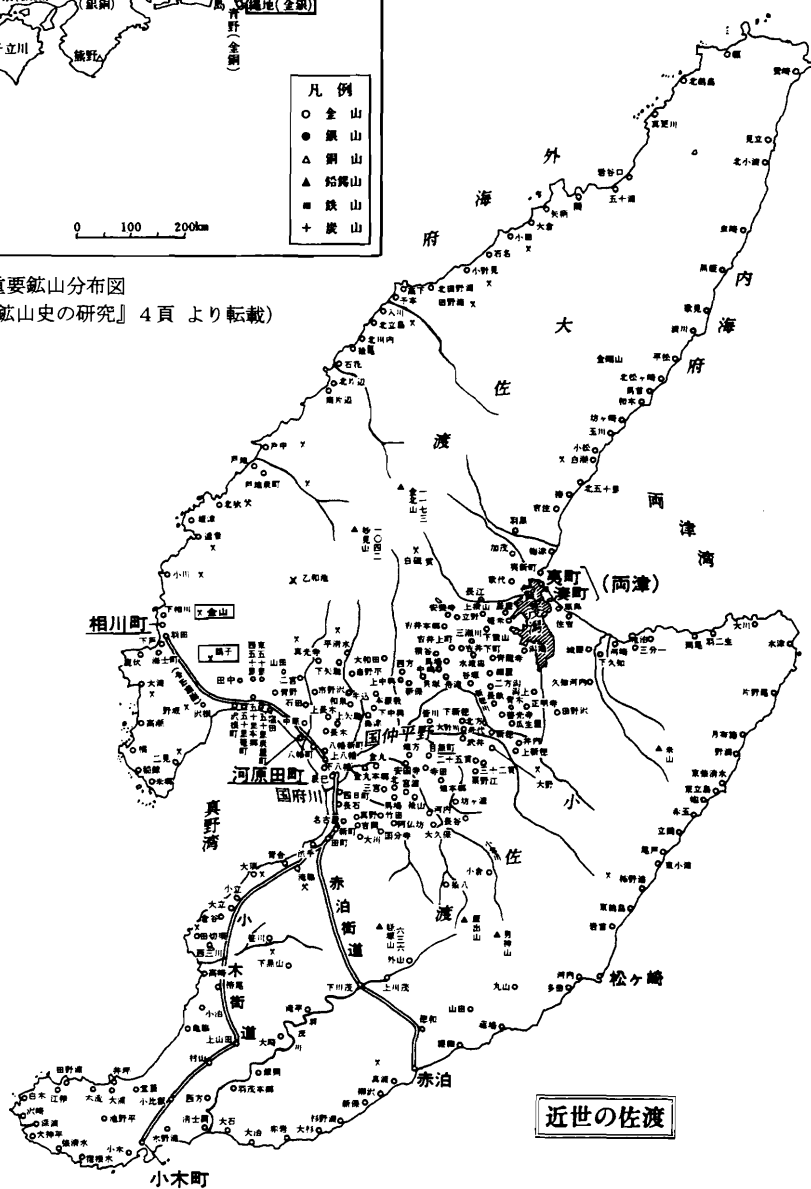
〔付記〕

本論文は、弘前大学人文学部教授・長谷川成一先生の指導により作成した卒業論文を基にしている。掲載にあたっては、長谷川先生、ならびに青森県史編さん室の小石川透氏に大変お世話になった。厚く御礼を申し上げます。

(つちや・ひろこ 弘前大学大学院修士課程)



地図① 16-19世紀中期の重要鉱山分布図
 (小葉田淳『日本鉱山史の研究』4頁より転載)



地図② 近世の佐渡 (田中圭一『帳箱の中の江戸時代史 下』より転載)